

アーサー・コナン・ドイル作
伊豆野 良江訳

クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

第十五章 ジョン・バーシア・ヘザーストンの日記（後半）

敵が最後の砦としていいる堆積した岩の脇の絶壁に、野獣の住んでいそうな洞窟があった。その暗い穴から、いきなり一人の老人が現れたのだ。老人も老人、普通の老人など、漢垂れ小僧に見えるほど年を取っている。髪もあごひげも長く、雪のように白い。黒褐色の顔は皺だらけで、まるで猿とミイラの合いの子のようで、手足も骨と皮ばかりにやせ細っている。目だけがキラキラ輝いていて、もしマホガニーの台座に埋め込んだダイヤモンドのようなその目がなければ、生きた人間とは信じられなかっただろう。

その亡霊のごとき老人は、敵兵と我々の間に割り込んでくると、かつて皇帝が奴隷にしたような尊大な態度で、我々に下がれという身振りをした。

「人殺しの者たちよ！」雷のような声が轟いた。しかも流暢な英語で。「ここは祈りと瞑想の場で、殺生の場ではない。すぐにここから立ち去るのじゃ。さもないと、天罰が下るぞ」

「そこをどけ」わたしは叫んだ。「邪魔すると、どうなっても知らんぞ」

敵兵が明らかに元気づく一方で、インド兵たちの中にはこの老人に怖気づく者もいて、完全な勝利を手にするには、一刻の猶予もならない。

自分は白人の砲兵の先頭に立って突撃した。老人はそれを阻止するように両手を広げてこちらに向かってきた。しかし、そんなことに気を取られている場合ではない。わたしが剣でその体を貫くと同時に、砲兵の一人がカービン銃をその頭に振りおろした。老人がぼたりと倒れるのを見た敵兵は、ぞつとするような恐怖の叫び声をあげた。

尻ごみしかけていたインド兵たちも再び前進を開始し、それからあとは時間がかからなかった。おそらく生きて逃げられた兵は一人もいなかったに違いない。

ハンニバル（カルタゴの将軍で戦術家として知られる）やシーザーでもこれほど輝かしい勝利を手にしただろうか。この戦いでのが軍の損害は、死者三名と負傷者十五名のみ。その上、コーランの言葉が書かれた緑色の敵の旗を獲得した。

戦闘の後、老人の死体を捜したが、どうしたわけか影も形もなかった。いったいどこ

に消えたのだらう。でも、まあ自業自得だ。余計な邪魔だてさえしなければ、命を落とさずにすんだらうに。いわゆる「公務執行妨害」だったのだから仕方がない。

斥候の話では、あの老人の名はグーラブ・シャーといって、仏教徒の中で最高位の聖者の一人だったらしい。予言者で奇跡を行う高僧として、この地方で誰一人知らぬ者がいないくらい崇められていたようだ。彼が倒れたとき、兵士たちがあんな叫び声をあげたのも、それでうなずける。ばかげた言い伝えがたくさんあり、中にはタメルラン（モンゴルのタイムール朝建設者）が一三九九年にこの峡谷を通りかかったときも、あの僧はこの洞窟に住んでいたというものであった。

わたしはその洞穴に入ってみた。どうしてこんな所に住んでいられたのか、不思議でならない。普通なら一週間ももたないだらう。高さは四フィートもなく、じめじめして薄暗い。粗末なテーブルと木製の長椅子があるだけで、そのテーブルには象形文字が書かれた羊皮紙の巻物が山積みされている。

今頃あの世で、仏教徒の教えより、平和と善意の福音の方が優れていると悟ったことだらう。安らかにあらんことを。

思った通り、エリオットとチェンバレンは主力部隊を取り逃がした。だから、本日の栄冠は自分のものだ。とにかく昇進は確実だらう。ひよっとすると、官報にも名前が載るかもしれない。なんとという幸運だらう！結局、これもジマーンのおかげだから、お礼に望遠鏡でもやりたいくらいだ。さあ、何か腹に入れよう。空腹のあまりくたばりそうだ。栄誉だけでは人は生きていけないのだ。

十月六日 午前十一時。昨晚の出来事を冷静に、そしてできる限り正確に記してみよう。わたしは夢や幻にたぶらかされる人間ではない。だから自分の感覚を信用しているが、もし他人から同じ話を聞かされたら、きつと信じなかったに違いない。そして、もし鈴の音があれつきりしなかったら、聞き間違えたと片づけていたことだらう。とりあえず、話を進めることにする。

昨晚、エリオットがわたしのテントを訪れ、十時頃まで葉巻をのんびりふかしながら話をした。その後、わたしはインド人士官を連れて見回りに行き、異状がないのを確認してから、十一時少し前に就寝した。

日中の戦闘の疲れですぐにうとうとしかけたが、かすかな音で目が覚めた。あたりを見回すと、テントの入口に東洋風の衣装をまとった男が立っていた。身じろぎ一つせず、敵しい表情でこちらを見据えている。

最初はてつきり、イスラムの兵士がアフガン人の狂信者が、自分の命を狙って忍び込んできたのかと思い、飛び起きようとした。ところが、どうしたわけか体が力が入らない。抗しがたいほどの脱力感だ。たとえ頭上に短剣が振り下ろされようとしていても、少しも身動きできなかつただらう。そのときのわたしは、蛇に睨まれた蛙同然だった。意識ははつきりしていたが、体の方は眠っているかのようにまったく動かない。

何度か瞬きをして、これは幻覚だと思ひこもつとしたが、目をあくたびに、そこには必ず威圧するような視線を注いでいる男がいる。

わたしはこの沈黙に耐えきれなくなった。なんとかこの無力感を脱して、やつに話しかけねばならない。初めて、ウエルギリウスの言った「喉に声がひつかかった」という本当の意味がわかった。やつとのことで、いったい何者で、何をしに来たのかを問うことができた。

「ジョン・ヘザストーン」男は重々しい声でゆっくりと言った。「きょう、そなたは人がなし得る最大の罪、世にも尊いお方の命をあやめるといふ、もつとも許されぬ冒瀆行為を行った。あの方は、そなたが生きてきたより長い年月修行を積んでこられた最高の聖者だ。まもなく精進によつて悟りを開かれ、御仏のすぐ近くまで達しようとしておられたのに、その命を断ち切つたのだぞ。しかも、追い詰められた無力な者たちのために命乞いをなさつていたのに、そなたは理由もなく手にかけたのだ。ヘザストーンよ、よく聞け！

数千年前、神秘学の研究が始められた頃、賢者たちは靈的生活を極めるには、人生はあまりに短いと悟り、己の命を延長することに精力を注いだ。やがて、彼らは自然の神秘に関する知識を深め、病や老いに打ち勝つ体を入れた。それでも、賢く高貴な者を倒そうとする、よこしまな人間の暴力から直接身を守ることはできなかったが、ある程度はそういう暴挙を防ぐことができた。神秘的な力によつて、罪人には必ず恐るべき報いがあるよう定めたのだ。

一定の高位に達した聖者の血を流したものは、死をもつて償わなければならないといふこの掟は、絶対に変えることはできず、現在も存在している。ヘザストーンよ、そなたはこの掟に背いたのだ。たとえ国王や皇帝であっても逃れられぬ。こうなつては諦めるしかあるまい。

昔ならその場ですぐに罰が下つたところだが、その後己の罪の深さを悟る時間を与えるべきだと判断された。そのため、犯行のあつたその日に実行しようが、何年後のその日にしようが、すべては高弟か聖者の弟子たちの手に一任されることになつたのだ。

なぜ報復の日がなぜ犯行のあつた日なのかは、そなたの知るところではない。だがこれだけは教えてやる。そなたがあやめた聖者の名前はグーラブ・シャーといつて、わたしはその復讐の任にあたる三人の高弟のうちで、一番高位にある者だ。

これは単なる個人的な事柄ではない。修行に励む我々にはそんな事柄に関わるゆとりはないのだ。この掟は不変のもので、そなたがこの掟から逃れられないと同様、我々も見逃すことは許されない。遅かれ早かれ、我々はそなたのもとに現れ、この償いとして命をもらひ受けるだろう。

もちろん、あの愚劣な兵士スミスも同様である。そなたより罪は軽いが、罰あたりにも仏陀に選ばれた方に手を上げた報いを受けるのだ。この先、そなたが生きながらえたとしても、それは己の過ちを悔い、報復の恐ろしさを思い知るための時間を与えられた

にすぎない。

そなたがその罪を常に心に刻んで忘れないために、われわれが秘儀に使う鈴を打ち鳴らすことにする。昼も夜もその鈴を聞いて、何をしようがどこに行こうが、グーラフ・シヤーの高弟から逃れられないことを思い起こすのだ。

呪われた者よ、その日が来るまで再び会うことはないだろう。死より辛い恐怖におののきながら生きるがいい」

男は威嚇するように言つと、テントからすつと闇の中に消えた。それと同時にわたしは無力な状態から脱し、すぐに跳ね起きるとテントから外を覗いた。数歩離れた所に、インド人の歩哨が銃にもたれて立っていた。

「ばかもの！」わたしはヒンズー語でどなりつけた。「なんであんなやつを通した！」歩哨は驚いた顔でわたしを見た。「誰か来たのですか」

「たった今だ。やつがおれのテントから出ていくのを見ただろう」

「いいえ、隊長殿の勘違いだと思われませう。自分は一時間もここにおりますが、誰一人テントから出るのを見てはおりませせん」歩哨は丁重ながらもきつぱりと答えた。

わたしはひどく当惑しながら寝椅子の端に腰をおろし、戦闘で神経が高ぶったせいで幻覚を見たのだろうかと考えた。と、そのとき、不思議なことが起こった。突然、頭上からチンチンという音が聞こえてきた。ちょうど空のグラスを爪ではじいた音を、もっと鋭く大きくしたような音である。

上を見上げたが、何も無い。テント中をくまなく調べてみたが、音のしそつな物は見当たらない。そのうち謎を解くのに疲れて、寝椅子に横になったとたん、眠り込んでしまった。

今朝目をさましたとき、昨夜の出来事はすべて幻覚だと思ひこもつとした。ところが、すぐにそつでないことがはっきりした。起き上がるとすると、あの奇妙な音がすぐそばではっきりと鳴った。いったい何の音で、どこから聞こえてくるのか、謎のままだ。その後は、今のところその音を聞いていない。

脅しは本当のことで、不思議な音はその警告なのだろうか。いや、そんなことはあり得ない。しかし、あの男の言葉や様子ははっきりと脳裏に焼き付いている。

男の言葉をできる限り正確に書きとめたつもりだが、ずいぶん書き落としてしまったような気がする。この奇妙な出来事は、この先どういつ終わりを迎えるのだろうか。仏教について少し調べてみようか。チェンバレンやエリオットには一言も話していない。今朝二人には、幽霊みたいな顔をしていると言われたが。

夕方、砲兵のルーファス・スミスと言葉を交わした。例の老人を銃の台尻で殴つた男だ。やはり、わたしと同じ体験をしたようで、鈴の音も聞いたという。いったい、これはどういふことなのか。頭が混乱している。

十月十日 神よ、助けたまえ！

將軍の日記は、突然ここで終わっていた。四日間空白の後のこの短い言葉こそ、その精神的打撃がいかに大きかったかを雄弁に物語っている。日記には明らかに最近書かれたと思われる文が、ピンで添えられていた。

この日以来、昼も夜もあの恐ろしい音を聞くようになり、そのたびに報復のことを思い知らされる。いつまでたつてもそれに慣れることはできない。それどころか、年を重ねてますます体力は衰え、神経はこの絶え間ない不安に押しつぶされそうだ。

肉体的にも精神的にももう限界がきている。四六時中、あの忌まわしい音に戦々恐々とし、そんな自分を悟られまいと友人にも心を開けない。心が休まる日は二度と来ないだろう。誓ってもいい、わたしは喜んで死を受け入れるつもりでいる。だが、十月五日がめぐってくるたびに、どんな恐ろしいことが待っているのかと恐怖におののいてしまうのだ。

わたしがグーラブ・シャールを殺してから四十年が過ぎ、四十回死の恐怖を経験してきたが、いまだに彼岸の平安を得ることが許されていない。

いったい、どのような最期を迎えることになるのか、自分には知る由もない。自己防衛本能が働いて、こんな片田舎に引きこもり、家の周りに壁をめぐらしたりもしたが、心の奥ではこんなことをしても無駄だとわかっていた。復讐の僧たちはもつすぐやって来るに違いない。すでにわたしは、いつ天に召されてもおかしくない年齢に達しているのだから。

わたしは青酸やアヘンに逃げなかった自分を誇りに思う。その方法なら、相手の鼻をあかしてやることもできたが、この世に生を受けた以上、いずれその時が来るまでは、自ら命をなげうつことは許されないと信じている。シーク戦争やセポイの反乱でも、わたしは進んで危険に身をさらしてきた。それなのに死神はわたしを見逃し、前途洋々たる若者を捕えた。おかげでわたしは生き延びて勲章や栄誉を手に入れたが、いったいそれが何になるだろう。しかし、こつしたことすべては偶然ではなく、何か深い意味があるのだろう。

唯一その埋め合わせとして、神は貞淑な妻を与えてくれた。結婚前に恐ろしい秘密を打ち明けられても、妻は気高くもその運命を分かちあつことを承知してくれた。しかし、わたしの重荷を半分背負わせたために、その重圧で妻自身の人生を押しつぶしてしまった。本当にすまないと思っている。

子供たちもわたしにとって慰めとなった。モータントはすべてを、いや、すべてでないにしろ、そのほとんどを知っていると思う。ガブリエルには一切を隠しておこつとしたが、何か秘密があることを悟られてしまったようだ。

それから、この日記をイースタリング医師に見せていただきたい。氏は一度この鈴の

音を聞いたことがある。世界にはまだイギリス人の知らぬ多くの知識が存在すると、わたしは氏に話したが、わたしの体験を読めば、それが真実だとわかってもらえるだろう。

J・B・ヘザストーン

わたしがようやくこの驚くべき日記を読み終えたのは、夜も明けようとする頃だった。その間、妹もモーダントも一心に聞き入っていた。窓から外を見ると、星は光を失い、東の空はうつすら白んでいた。獵犬を飼っている小作人の家までは数マイルある。そろそろ出発の時間だ。エスターには、居残って父に適当に事情を話しておくよつ言い、わたしたちはポケットに食べ物詰め込むと、重要な役目を果たしに出かけたのだった。